

防災歳時記 (50)

—江戸のおばあさん気象予報士—

NHK 放送用語委員会専門委員

元 気象庁天気相談所長

宮 澤 清 治

天気予知は人間の夢だ

明日の天気を前もって知ろうとすることは、大昔からの人間の夢だ。わたしたちの祖先は、風や雲、風景などのかすかな変化をとらえて明日や何日も先の天気を予想してきた。

紀元前 4 世紀から 17 世紀ごろまで(気象観測機器が出現しない時代)は、雲などの空の状態や動植物の生育などを観察して明日の天気を予知した。そして「丹後のうらにし(北西風)、弁当忘れても傘忘れるな」「コブシの花の多い年は雨や洪水が多い」などという天気のことわざをまとめた。また、台風来襲の厄日である「二百十日」や「八十八夜」に代表される災害の発生日を経験則として導き出した。

現代では、アメダス、レーダー、気象衛星、スパコンによる数値予報などの科学的な方法で天気予報ができるようになった。しかしハイテク時代でも、天気予報が完全に当たるというわけにはいかない。天気予報の的中率は、明日・明後日の短期予報で約 80%、3~6 か月先の長期予報で約 60%とされる。

おばあさん気象予報士活躍す

こんな話がある(日本農書全集 35)。

江戸時代の寛文年間(1662 年ころ)、但馬おしま国城崎郡小嶋村(現、兵庫県豊岡市小島)。

円山川の河口の西岸というところに、80 歳を超えた老婆がいた。このおばあさんは雲や霧の動きを見て、雨や風を予知する不思議な才能を持っていた。

近くに住む農夫や漁師らが昼も夜もおばあさんの所に来て、明日の天気を尋ねるのだが、一度も予想が外れたことがなかった。

養蚕家が、ある年の蚕の出来、不出来を聞いたところ「今年の5月初旬は天気が続き、その後は雨天になる。これから判断すると、早く蚕を飼えば利益が上がり、遅れて飼えば利益は少ないだろう」という答えが返ってきた。案の定、おばあさんの言ったとおりの結果となった。長期予報も当たったのだ。

あるとき、大阪堂島の米問屋の主人が近くの城崎温泉に湯治に来て、このおばあさんのことを耳にした。江戸時代の堂島は世界最先端の米の先物市場だった。

主人は「このおばあさんを大阪に連れて帰



おばあさん予報士へ大阪へ
(日本農書全集から)

り、毎日の天気を見させて米相場を張れば、大もうけすることができる」と考え、ひとりこっそりと笑った。

早速、ばあさんの住んでいる村に行って彼女を雇い入れ、早かごに乗せて大阪に連れ帰り、別宅に住ませた。

このことは他人に言わず極秘にしておいた。ばあさんからは毎昼毎夜、晴雨の兆しを聞いて米相場を張ったが、どういうわけか、ばあさんの言ったことが一回も当たらず、思惑と違って大損をしてしまった。

そこで主人は、ばあさんを責めて「おまえは天気を判断することに不思議な才能を持っていると聞いたので、大金を使って大阪まで連れ帰り養っているのだ。何が気に入らなくて、私にこのようなばく大な損をさせたのか」と問い責めた。

ばあさんは「まったくもって、ここでの不満があつてうそを申したのではありません。



晩秋の積雲（京都府宮津市）

ただ、大阪には郷里の但馬国のように海辺に高い山がありません。そのため、いろいろと注意して雲の具合を見たのですが、とにかく判断がしにくうございます」と答えた。これを聞いた主人は、ばあさんを使って相場を張ることをやめてしまった。

ばあさんは長い間、朝に夕に生まれ故郷の津居山(円山川河口西岸にある標高 159m)にかかる雲を見て、かつ生まれつきの才能もあって天気予知の方法を身につけていた。

「〇〇山に笠雲がかかると雨が近い」式の観天望気の方法は、住んでいる場所や地形によって違う。まして日本海側の但馬の方法が、近くに山の見えない太平洋側の大阪に通じるわけがない。

さりとて、観天望気を軽視するわけにはいかない。100%完全でない現代の予報技術を補うのに、局地の天候や自然をじっくり観察するという態度を大事にしたい。伝承や言い伝えを読み解き、観天望気を防災に役立てるという視点は、現代のハイテク時代でも今後ますます重要になってくるであろう。

[参考文献]

山田竜雄ほか編、1981：日本農書全集 35、農山漁村文化協会